資料紹介

谷浦妙子編「NAFTAとアジア経済：自由化による地域統合への対応」アジア経済研究所，1996年，xv＋307ページ

北米自由貿易協定（NAFTA）の実現は，その当事者であるメキシコにとって大きな意味を持つことはもちろんだが，これまで北米市場に依存してきた他の発展途上国にとっては直接投資および貿易に関連して不利益が発生することが理論的には予想されている。とくに一部の産業で厳しく規定された原産地規定がアジアからの輸出を困難にすることは地域統合の保護主義的な側面として危惧されてきた。

しかし，本書の予想するところでは，アジアの国々（本書でカバーされているのは韓国，台湾，香港，中国，シンガポール，マレーシア，タイ，インドネシア）がNAFTAから受ける影響はほとんど無視できる程度のものである。これは，アジアにおいてはすでに域内経済の結びつきが相当に深まっていて，これが成長の源と考えられていることを示している。

本書はこのようにNAFTAを外側から見た新しい視点を提供しており，アジア諸国の対応がコンパクトにまとめられている。（浜口伸明）

Valdes, Juan Gabriel, *Pinochet's Economists : The Chicago School in Chile*, Cambridge, Cambridge University Press, 1995, xiii＋334p

チリは，他のラテンアメリカに先駆けて，1970年代に一連の自由化政策に着手した。これには，当時のピノチェト軍事政権が，共産主義政権を倒して樹立された政権であるという要因が大きい。しかし，軍事クーデターにより成立した他の多くの政権では，これほど徹底して新古典派主義の経済政策がとられなかったことを考えるとき，チリには何らかの特殊要因があるはずである。本書は，この特殊要因の解明を試みている。

本書で興味深いのは，チリにおける経済政策の変化を，米国からの経済思想の伝播という学問的リンケージから説明を試みている点である。米国は，当時ラテンアメリカにおける反共産主義思想を醸成するという明確な目的があった。そのために，援助機関を通じた留学プログラムが実施され，チリのカトリック大学から，米国のなかでも特に保守的といわれるシカゴ大学へ多くの経済学徒が送り出され，彼らは帰国後その教えを大学で教授した。こうして，チリにおける新古典派経済思想の再生産システムが確立した。著者は，このことが，軍事政権におけるいわゆる「シカゴ・ボーイズ」と呼ばれる経済政策ブレーンと，それを支持する広い層の形成に寄与した，と主張している。

経済学を科学としてみる立場からは，経済学の進歩を単線的にとらえ，経済政策の選択は客観的基準に求める。しかし，現実には「経済学」の進歩と，「経済政策」の選択には，その他のさまざまな要因が関連していることを考えさせられる。（北野浩一）

石井　章編「冷戦後の中米：紛争から和平へ」アジア経済研究所　1996年　192ページ

本書は，近年の中米諸国の政治・社会変動について書かれたものである。中米は1980年代以来の地域紛争がようやく収束に向かい，和平と新たな社会の

建設のために踏み出しつつあるが，その過程でさまざまな問題に直面している。

本書は，５名の著者が分担して，地域統合，エルサルバドルの政治改革，エルサルバドルとニカラグアにおけるゲリラと政府軍からの除隊者の社会復帰問題，軍民関係，ニカラグアの農地改革，グアテマラ紛争解決のプロセスについて書いている。対象国はテーマに沿って，紛争国に限定されており，コスタリカ，パナマ，ベリーズは入っていないが，それぞれのテーマについてほぼ１カ国に絞って詳しく分析し，示唆に富む内容となっている。（山岡加奈子）

大串和雄著『ラテンアメリカの新しい風：社会運動と左翼思想』同文舘　1995年　240ページ

1970年代から現在まで，ラテンアメリカ諸国の政治体制は大きく変容してきた。その歴史の中で，ラテンアメリカの左翼思想および左翼政党の志向も質的な変化を遂げ，左翼主義者がリーダーシップをとっている場合が多いラテンアメリカの社会運動のあり方も変わってきた。

本書はラテンアメリカの中でも社会運動が盛んなチリ，ペルー，ブラジルの社会運動と左翼政党そして左翼思想の変遷を考察し，分析する。

構成は，第Ｉ部第１章で，ラテンアメリカにおける社会運動の興隆とその背景要因を考察，第２章で先述の３カ国の社会運動の実態を紹介，第３章で欧米諸国の社会運動と比較しながらラテンアメリカの社会運動に見受けられる新しい政治文化を考察，第４章でラテンアメリカの社会運動についてこれまでなされた研究の動向を概観，第II部で３カ国の左翼思想および左翼政党の変遷を概観，となっている。

本書のメインテーマは，ラテンアメリカにおける真の民主化がどのような形で実現しうるのかという問題である。（村井友子）

サルマン・ラシュディ著（飯島みどり訳）『ジャガーの微笑：ニカラグアの旅』　現代企画室　1995年　182ページ

ニカラグアのサンディニスタ革命からはや16年，すでに革命政府は倒れ，チャモロ政権へ移行して７年目を迎えている。

本書は1986年，革命７周年目のニカラグア訪問記である。当時はレーガン米政権が対ニカラグア経済封鎖を強化し，中米全域でコントラとの衝突が絶えないただ中にあった。３週間という短さの中で，オルテガ大統領をはじめサンディニスタ政府の中枢，ニカラグアを代表する詩人たち，米人ジャーナリストやボランティア，さらにはビオレッタ・チャモロ女史まで，筆者が出会った人々（いずれもニカラグア現代史の立役者ばかりであった）の語りを通して，当時のニカラグア社会を生々しく描き出している。

事実を忠実に伝えながら，ラシュディの独特の風刺に満ちた語り口は見事にニカラグア世界を広げてみせる。筆者があの『悪魔の詩』を書いた異文化圏の作家であることもこの作品を新鮮なものにしている。

訳者はニカラグアをはじめ中米およびイベロアフリカ圏研究者であり，あとがきに記されたその後のニカラグア動向はこの国に馴染みの薄い読者の理解を助けるものである。（幡谷則子）